The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	学校という「踏み絵」
Author(s)	畑, 英理
Citation	臨床哲学のメチエ. 1998, 1, p. 9-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5533
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

サン・テグジュペリの『星の王子さま』のなかの有名な言葉を最後に引用したいと思います。
「おとなは、だれも、はじめは子どもだった。（しかし、そのことを忘れずにいるおとなはいくらもいない。）」

このような言葉は本当に子どもであった頃、心に響くのではなく、大人のための言葉であると思います。言葉を持たない、それゆえに簡単に自分の中から消え失せることもあろう、子どもが私の中でどう生き続けるのか、また生き続けることが出来るのか大人になった今問われているような気がするのです。

（くりたりゅうこ・博士前期課程）

「学校」という踏み絵

畑　英理

今から５年前、次男が小学校４年生の３学期に「不登校」状態になりました。その後、約２年あまり、断続的に学校に行ったり行かなかったりする状態が続きました。理由はさまざま考えられますが、何か一つを特定できるようなものではなく、複数の要因が重なった結果と思われます。

その時「登校拒否をしている子供を持つ母親」という立場に立たされることで、それがどのような言説のなかに置かれているか、社会から何が要求されているのか、身を以て体験しました。

また、「不登校」という表現をとおして息子が訴えていることに、一人の人間として応えたいと思う、けれどまた、彼の自立に責任のある立場からは、やはりこの社会の枠組みのなかで生きていくことが望ましいと思っている、そういう矛盾したところに立たざるを得ない「親」の立場から、報告したいと思います。

また、彼はいまごく普通の中学生として通学していますし、彼自身、「もうこれから、あんなこと（登校拒否）はない」と言います。けれど、それで「問題が解決した」とか「登校拒否を克服した」というふうには、彼も私も考えていないのです。ただ、今はこういう状態、と言えるだけで、もともと「問題を解決」したり「克服」するような思考形態に最も馴染まないのが、この「不登校」という現象ではないかと思えます。

１．「行かない」と「行けない」

彼が４年生の時、友人や先生をめぐって学級内でトラブルがありましたが、それは「いじめ」というようなものではなく、個人的な人間関係のねじれのようなものだったと理解しています。そのため学校を休みがちのこともありましたが、その時は、両親とも比較的冷静で、「彼にとって納得できる方法で解決するだろう」と何となく考えていました。

ところが、ある日、『学校の怪談』というテレビドラマを見てから「学校が恐い」「学校に行けない」と言って全く登校できなくなってしまいました。「きょうは学校に行かない」と言われても特に驚かなかったのに、子供に「学校に行けない」と言われた時、今まで感じなかったような困惑を感じ、「これは困ったことだ」と思いました。

その驚きと困惑は、親だけではなく担任の先生にも同じようにあったようで、事情をお話しすると、すぐに教育委員会のやっている「教育センター」というところでカウンセリングを受けるようにアドバイスを受けました。他の地域でもそういうシステムになっているようですが、特に小学生の不登校は、一種の「発達障害」とみなされ、

専門家によってカウンセリングを受けることで、親も教師もその「専門家」の意見を参考に、子供に接していくことを求められるようです。

その時、私は「教育センター」というものの介入に、非常に警戒感を持ちました。多少、こちらの思い込みがあるかもしれませんが、「カウンセラー」が「教育委員会」に所属していることへの疑問がまずありました。もう少し、自由な立場の方が、公平にものが見られるのではないか、と思ったのです。また、その「カウンセラー」が、教師や親に対してつよい指導力を持ち、「学校にもどす」ことを前提に主導権をもって子供の「カウンセリング」をする、ということへの疑問は、今でも抱いています。

もちろん、個別には「教育センターのカウンセリングがとてもよかった」という方がいるのも知っています。どんなものでも、一般化して批評することはできませんが、私自身としては、その時の非常に不安定になっていた子供がカウンセリングを受けることが、かえって「こころの内部ををいじる」ことになるようで、させたくなかったのです。また、「こうなってしまった」ことの「犯人」を探し、原因をつきとめることが、子供にも親にも良い結果にならないような気がしました。

それは、「彼の問題」が「不登校という現象」になってあらわれているのに、「不登校」という個別性のない概念のなかで「彼の問題」が語られてしまうことへの不安、と言い換えられるかもしれません。

先生には「この場で起きた問題なので、この場で、今までの彼を知っている人のなかで解決したい」と、改めてお願いしましたが、先生自身も「専門家の意見が聞きたい」という考えのようでした。

2．「不登校の子供を持つ親」があらわすもの

さて、子供が学校に行っていない、ということになると、その「不登校」をどう評価するか、「世間」から問われている、と感じます。何か一方的に「子供の不始末を恥じる」立場に立たされ、「肩身が狭い」身の上にさせられているようで、「そうではない」と言うことに、とても大きな抵抗を感じます。その時の「世間」というのは、学校の先生であり、お母さんたちであり、ご近所の人、両親（子供の祖父母）、母親にとっては夫でもあります。これは実はおかしなことなのですが、「子供の教育は母親の責任」という「常識」があり、最も身近な人から最も強い圧力を受けるようです。子供のことを気に病む以前に、多くの母親はこの「社会的評価」の前にくじけてしまうのではないかと思うぐらい、これは強いものでした。

一方、子供自身も、そういう「常識的な評価」の前にとても揺らいでおり、「学校に行けない自分」をどう見るか、親に問いかけています。それは「自分への不安」から「承認」を求めていたのだと思いますが、本来親子関係に「学校へ行ける」「行けない」ということが影響するはずはないのに、彼の不安は、どこかで自分の存在の承認を必要とするような、根源を揺るがすもののように見えました。

こうして、「世間」というものと、自分の子供と双方から「問われる」ことによって、自分が無意識に持っていた「学校」を中心

とした価値観をあぶり出して見せられることになります。今まで、私は、こういう社会通念としての「常識」から比較的自由であると思っていたのですが、自分が縛られていたものを見せつけられた様な気がして、その大きさに愕然とするほどでした。自分自身の内面化した価値観を揺るがす「自分の子供」とつきあうことは、どこかに「本能的」といっていいような抑制がかかっている、と感じるほどに、「自分の根源」も揺らぐような体験だった、ということができます。このようななかで、「親」としてできることは、私の場合、「問われる」ことから逃げない、というだけだったように思います。

人間は、何らかの社会的制約を受け、規範に従って生きることで安定を得るものです。「学校」というシステムが子供の行動を全て管理しているような現状では、それをはずすと、自分を形成する枠組みがなくなってしまう。「不登校」の子供たちはそういう非常に不安定な状態に突き放されているように思います。「学校」以外の場所、家庭とか、共同体に、そのような個人の自由を越える「規範」が希薄になっていることも、要因としてはあるでしょう。

カウンセリングなどでは、親が子供の今の状態を「受容する」必要を説きます。親子関係はそれでいいかもしれませんが、「親の受容」だけではこの不安を解消できないように思うのです。

「あなたは学校に行かなくていいよ」と、たとえ子供に言ったとしても、それで子供の不安は解消されないだろうし、そう言う私自身が、「では、何が大切なのか」ということに答えられないように思うのです。子供の不安はそのように社会的なものです。

いま振り返って、その「不安」は避けるべきことではなく、「不登校」という問題提起をした自分自身の課題として、彼が自分で向き合わなくてはいけないことだったと思います。むしろ、「規範」として外を捜すより、子供が「行かない」ことで「何を守ったか」を、自分のなかでみつけられればそれが非常に大事な糸口になるだろうし、こういう場面で、思考の道筋を自らたどる上で、「哲学カウンセリング」というものは有効な手段であるように思います。

３．学校と地域――学校への忠誠

学校に行けなくても、子供が同世代の子供に交じって、対等で自由な人間関係をつくっていける場があれば、「不登校」の問題も多少は解消されるのですが、義務教育では、普通「学区制」というものに地域ぐるみで縛られていて、学校に行けなくなると、地域の友人とも自由に遊べない雰囲気ができてしまいます。「地域の学校化」と呼ばれる現象ですが、私の住んでいる神戸市は、非常に管理されたニュータウンが多く、「学校」を中心とした価値体系に信仰のように支配されていると感じます。

こういうところで「学校に行っていない」ことを公言するのは、あたかも「学校」という「踏み絵」を踏まないことに等しいのです。この「体制」、またこの「支配」に、私は従わない、と言っているわけで、そのような「不服従」は、なぜか「反体制」や「非行」などの「反抗」より、罪が重いらしいのです。そして、この選択を公にすることで、親子ともに”Guilty”の烙印が押されるように感じます。

昨年の、神戸市須磨区で起きた少年事件は、特にニュータウンというものの「隙間のない」「息苦しさ」を象徴した事件であるように言われました。その時、この街全体にかかっている「学校の影」は、大変大きなものだったと考えられます。そのことについては、多くの方が言及しておられ、近隣に住む私自身としても、隙間なく計算されつくした街の息苦しさは日々感じていることです。

ただその街にも、生きている人々の生活

があり、人と人の絆があるはずだと思うのです。

あの事件が起きる１カ月ほど前、私は犬を繋いで郵便局で用事をしていました。外で鳴いていた犬の声がふと静まり、用を済ませて出てくると、ある婦人が犬の相手をしてくれているのでした。その方は震災で飼犬を亡くされ、仮設住宅に住んでいる方でした。倒れた食器棚のガラスが犬のお腹にささったこと、家は全焼し、避難した小学校の体育館で、ボランティアの獣医の方が、傷口から膿の出た犬の手当をしてくれたこと、10日ほど生きて、犬はその体育館で静かに息を引き取ったこと、などを淡々と語られ、「あんまり悲しいので犬はもう飼わないことにしたんです。だから、こうやってよその犬に慰めてもらっている。」と、話されました。

「少年」が、その同じ郵便局のまえのポストから新聞社への「挑戦状」を投函したこと知ったとき、私は何とも言えない暗澹とした気がしてなりませんでした。確かに「息苦しさ」はあるのです。けれど、同じ場所が、そのご婦人と我が家の犬の「慰めあう」場所になっていたのも事実なのです。

地域社会がどんなに「息苦し」くても、それは所与のものであり、アウシュヴィッツでも、スラム街でも、ニュータウンでもそこに人間が暮らしていれば、かならず友情もあり、「人間の自由と尊厳」があるはずです。私はその人間性の確かさを信頼したいと思う。けれどこの事件の場合、「学校」が「少年」の人間性を封じ込めたもののひとつであるように思え、それはなぜなのか、彼に世界はどのように見えていたのか、私には分からないのです。

「不登校」を起こしていた息子は「少年」と１歳違い、「学区」でいえば、隣り合わせの様なところに住んでいます。その「はるかな隔たり」と「意外な近さ」に息を呑むのは私だけでしょうか。

（はたえり・研究生）

誰が「なぜ学校に来るのか？」に答えられるか

寺田俊郎

０．はじめに

教育現場の経験者として話題を提供することが私に与えられた役目ですが、この役目は私にとって少し荷の重いものです。というのは、私の教員としての経験はとても限られたものだからです。

私の主な教員の経験は、京都の洛星中学・高等学校に６年間英語科の教諭として勤務したことですが、大学院時代に非常勤講師として３つの私立高校－女子校で４年間、